〔神仏展によせて〕

描かれた神仏の風景
—中世から近世へ—

「国のまほろば」と称される奈良盆地から周囲の山々に眼をやれば、若草山から春日の原生林、見上げるような生駒の山塊、大和三山の背後に広がる二上・葛城の山並み、均整のとれた三輪山の形状など、長い歴史に彩られた景観に心が和みます。そして、これらの山々はいずれも神や仏のいます場所であり、聖域であり、霊山と称すべきものです。中世、このような神仏の風景がしばしば絵画化されました。

今回の展観では、館蔵作品のなかから近畿の霊場を描いた「笠置曼荼羅図」「柿本曼荼羅図」「日吉山王曼荼羅図」「春日曼荼羅図」「竹生島祭礼図」が展示されます。これらの画面構造を参照しながら、中世から近世へといたる風景観の展開について考えてみたいと思います。

「笠置曼荼羅図」（図1）は、南山城、木津川沿いの山中にある笠置寺（京都府笠置町）の伽藍を描いたものです。創建は奈良時代と伝えられ、高さ15メートルの弥勒磨崖仏もこのころの造立と考えられます。平安期、弥勒信仰の高まりとともに貴顕がしばしば参詣しますが、寺運の著しい向上は鎌倉初期の興福寺僧・貞慶の入寺を契機とします。したがって本図の制作も南都周辺に求められるでしょう。自然景に配された磨崖仏・十三重塔・懸崖の回廊・僧坊など人工物のバランスの良さと画面の視点の統一感は鎌倉絵画中でも出色といえます。その一因として考えられるのは、塔・磨崖仏・懸崖造の回廊などいずれも垂直を基軸にしたモチーフを描いていることが挙げられます。他の社頭景観を描いた図が水平の境内を俯瞰的に描くのとは異なり、垂直の掛け軸というフォーマットに景観自体の親和性がもともと強かったのでしょう。この点は、神道絵画の傑作「那智滝図」（根津美術館蔵）とも共通します。

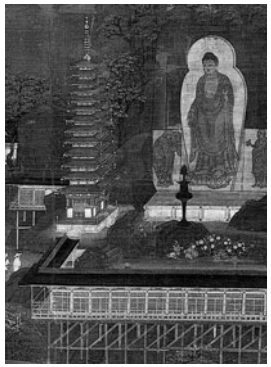
「柿本曼荼羅図」（図2）は、治道（はるみち）社（中世に柿本宮と称す）とその神宮寺である柿本寺を描いた作例です。現在の和爾下（わにした）神社（奈良県天理市）周辺に当たります。画面上方にこんもりとした半円状の山を重ね、本地仏を配し、中央に社殿、下半を参道とするのは、「春日曼荼羅図」の構成を踏まえたもので、本図の制作も鎌倉期の南都周辺と考えられます。本殿・若宮・柿本寺などが描かれた空間は、回廊と朱塗りの瑞垣で囲まれた台形で、左右対称の奥行きを示すとともに、ここが画面中の要所であることを象徴的に示します。下端の鳥居から続く参道は逆C字型に上へと向かい、本殿楼門へ向かう石段へとつながります。屈曲する参道沿いには十二社神社、弁財天社、柿本人麻呂ゆかりの歌塚が配されますが、こちらは実際の景観構成に依拠するものでしょう。すなわち、本図は中世に大量に制作された「春日曼荼羅図」の構成を踏襲しつつ、本殿空間の神秘性を左右対称で表現、参道は実際の配置を参照し、礼拝の対象として、そして絵図としての両面を巧妙に並立させているわけです。

「日吉山王曼荼羅図」（図3）は鎌倉末葉の作例ですが、数ある同主題の作例の中でも異色の画面構成を持っています。それは境内の社殿をことさらに大きく描き、それぞれの中にある本地仏へと視線を誘導するという点です。そして、全体の風情は「神域の中に蜃気楼のように土台ごと出現した社殿」（関口正之「大和文華館『日吉山王曼荼羅』—神々に対する作者の心象—」、『美のたより』143、2003年）と評されるように、景観としての実感的構成よりはむしろ観念的なものが強く前面に押し出されているようです。社殿のひとつひとつが、あたかも本地仏の姿そのもののように聖域に影向し、寄り添い鎮座する、そんな表現といえるでしょう。

「春日曼荼羅図」（図は5頁参照）は、前述の二作に比べ、やや時代の下る南北朝時代の制作と思われます。画面中央にほぼ直線の参道を、その左側に主要な社殿を整然と配し、上部には三笠山と虚空を漂う本地仏群を描くという、同主題作例の基本形をよく踏襲しています。現代的な眼から見れば、境内は上空からの俯瞰、背後の三笠山は地上から仰ぎ見た形態になり、二つの視点が混在、あるいは融合しているように感じます。また、上空の視点から一の鳥居をくぐって参道を奥へと進んでいくわれわれの視線は、あたかも航空機が滑走路に着陸していくような錯覚にとらわれはしないでしょうか。そして本殿前まで進んで三笠山の山懐に抱かれるのです。

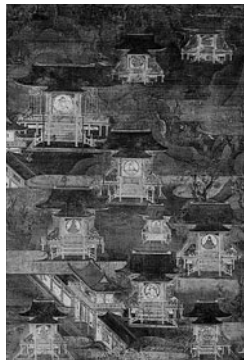
「竹生島祭礼図」（図4）は琵琶湖北部に浮かぶ竹生島の都久夫須麻神社と神宮寺の宝厳寺、そして六月十五日に催される蓮華会という祭礼を描きます。同社は中世にたびたび火災に遭い、現状の建築物は慶長八年（1603）頃に豊臣秀頼によって再建されました。本図も江戸初期のものと推定されます。画面は湖上にある架空の視点から島を俯瞰的に描き、祭礼のために集まる船を印象的に描きます。中世の社頭景観図と根本的に異なるのは、霊場の静謐さや神秘性を強調するのではなく、祭礼という人間と神との年に一度の交歓の情景に主眼が置かれている点でしょう。神性から賑わいへ、霊場の近世化は絵画をも変えていくのです。　（高岸輝）

（図1）「笠置曼荼羅図」

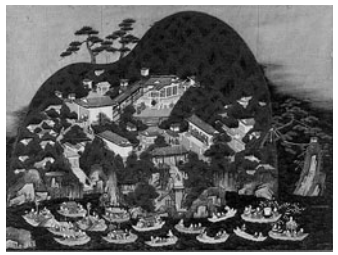


（図2）「柿本曼荼羅図」

（図3）「日吉山王曼荼羅図」



（図4）「竹生島祭礼図」



季刊 美のたより №151
平成17年 7 月 8 日
発行 大和文華館

Copyright ©2007 The Museum Yamatobunkakan. All Rights Reserved.